伴侶について

作――追田琴梨

1

詠子がその短い生涯において何度「ターミネーター2」を見たのかは、妻である私にとっても計りかねるところである。

最初に見たのが十三歳のころ、それから月に最低一回は観賞していたらしいから少なくとも計二五〇回は越えている。どれだけ映画を見るようになっても、変わらず心のベスト一位のままだと折りに触れ言っていた。

週末にテレビの洋画劇場で久しぶりに放映するというので、ビールでピスタチオをつまみつつ流しっぱなしにぼんやり眺めていた。

昔からあまり好きな映画ではない――そもそも詠子とは逆で、元来アクション映画そのものがあまり好きではないのだが、二十年ぶりくらいに見ても尚、筋も台詞もほとんど丸々覚えていたことに驚かされた。

終末思想を説く気狂いの母を抱えた、美しい少年が主人公。彼は未来からやってきた殺人ロボットにより命を狙われ、同時に別の正義の殺人ロボットから守られる。そのようなプロットの印象しかないつもりが、映像を追っていれば次に誰がなにを言って、どう銃を撃つかがはっきりと分かる。

生前に付き合って見せられるうち、全盛期のシュワルツネガーの肉体美から繰り出される様々なワイルドな動作を、記憶に叩きつけられていたらしい。愉快な気分にはならなかった。

アクション映画を好まない理由のひとつに、筋肉質すぎる人間に男女問わずあまり興味を抱けないという個人的嗜好がある。

詠子はいつもDVDを流しながら機嫌良さそうに「やっぱシュワちゃんはいいなあ。永遠の憧れだよー」などとふしぶしで言うものだから、決まってテレビの前に立ちふさがっては彼女の頭を掴んで呪詛を唱えておいた。

「もしもあんたが割れた腹筋に力こぶ自慢のアマゾネスになったら、即別れる」

末尾は後年には『別れる』から『離婚』にマイナーチェンジした。

実際はBMI値が終生十七の境をいったりきたりし、二十歳を超えても俗に言う女らしい丸みもなく骨ばっていて、不健康を絵に描いたような彼女がオイル塗れが似合う筋肉質になどなれる筈もない。

それらを自覚している本人も「なりたくてもなれないよ！」と子供のようにふくれつらをしながら、リモコンを手に映像を巻き戻す。

「いい場面だったのに！」

最後の戦いだろうが、ガソリンスタンドで盗みを働く場面だろうが、決まってそう言う。

そんな反抗期の子どもじみた態度がとても好きで、いつも姉気取りでからかいたくなっていた。

今思えば。追想に耽ってすっかり忘れていたテレビ画面に目をやったとき、ふと連想をする。このジョン・コナー……映画の主人公役の美少年は、すこしだけ詠子に似ている気がする。

物語は溶鉱炉でのラストシーン、主人公たちの命を狙う敵との戦いも佳境を迎えていた。

がんばれ、詠子。と、画面のなかの金髪の少年を応援する。最後にどうなるかは当然分かっているのだけど。

私が最初にこの映画を見る羽目になったのは、たぶん詠子と二度目に寝た日だったと思う。